

世田谷文学館 ニュース

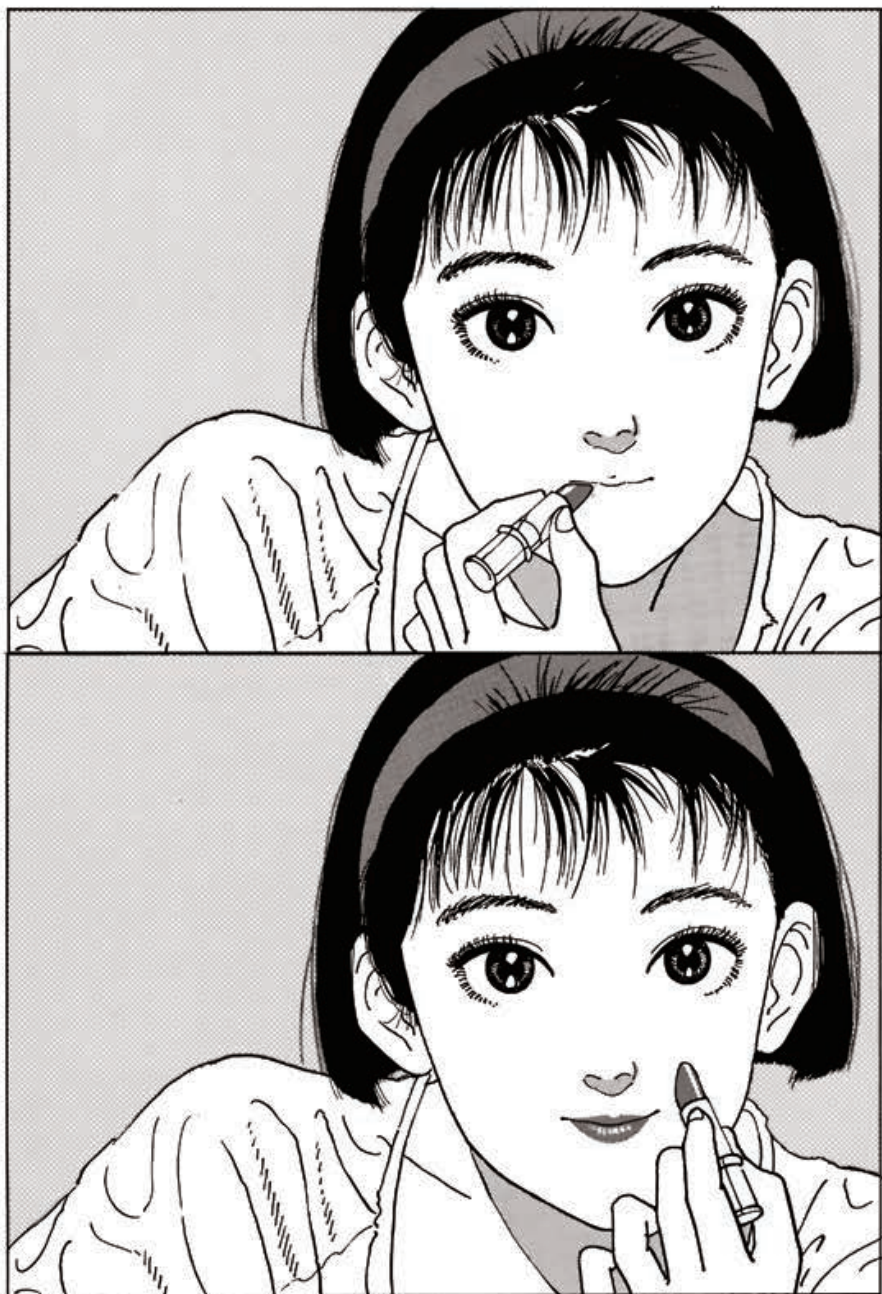
SETAGAYA LITERARY MUSEUM

巻頭エッセイ

「眩しい光、自由の影」

椎名鱗三の「アナキー」

亀山郁夫（世田谷文学館 館長）



© Eguchi Hisashi 「パパパリンコ物語」beat.5 今日でお別れ!?

眩しい光、自由の影

椎名麟三のアナーキー

世田谷文学館館長
亀山 郁夫

1

第一次戦後派を代表する作家の一人、椎名麟三にスポットを当てたコレクション展「椎名麟三と『あさつて会』」がこの八月に閉幕した。来場者数三千八百人強。けっして多いといえる数ではないが、私個人にとつてはひとときわ印象に残る展覧会だった。椎名が、学生時代の終わりから関心を抱きつづけてきた作家の一人だったことが何よりの理由である。もともと、展覧会がオープンするまでに手にした作品といえ、彼のデビュー作『深夜の酒宴』とドストエフスキー関連の二作『悪霊』脚本と『ドストエフスキー体験』ばかりで、しかもそれらすべてがうる覚えというお寒い状況にあった。ただし、『深夜の酒宴』の中の有名な一行「絶望と死、これが僕の運命なのだ」だけは、私の記憶の片隅で約半世紀近く、蠟燭の炎のような細々とした光を放ってきた。

気持ちで「深夜の酒宴」を読み直し、永年の課題だった最晩年の作品『懲役人の告発』に挑戦した。率直に書くと、『懲役人の告発』の最初の数頁に関するかぎり、かなり失望した。期待が大きすぎたせいもあったのだろうが、問題は、ひとえに一人称告白のスタイルにあると感じた。そしてこれも遠慮なしに書けば、作者の気迫がどこか空回りし、読者の意欲を逆に殺んでいる印象を拭えなかったのである。だが、そうした違和感にもやがて慣れ、プロットラインが徐々に浮かびあがってくるにつれて、私の見方に変化が生じはじめた。読みにくいと感じた部分のほとんどが、じつは椎名の先鋭な方法意識にもとづく、確信犯的な文章術とわかつたからだ。事実、椎名は、刊行直後に行つた野間宏との対談で次のように語っていた。

「ぼくは今までの自分の文体を全部変えなければいけないということに達着した」では、ここに書かれている「全部変え」という決心は、果たして何を契機として生まれたものか、改めて認識されるにちがいない。

景がある。それが、先ほども触れた一九六〇年代後半の日本の時代相――『懲役人の告発』が書かれた六〇年代終わり、日本はGNPでドイツを抜き、戦後二十年にしてアメリカに次ぐ第二の経済大国にのしあがった。高度成長の流れに抗し、カウンターカルチャーや学生運動も盛り上がりを見せはじめた。時代を定義するキーワードの一つが、「疎外」。「疎外」は、人間の創造になる機械、商品、貨幣等が人間の手から離れ、逆に人間を支配しはじめる状況を言うが、当時、学生運動に走った友人たちが、しきりにこの「疎外」という言葉を口にしていたのを、私自身よく記憶している。実存主義文学の草分け的存在であり、今はすでにキリスト教に転向した身であるとはいえ、元共産党員のれつきとした左翼の肩書をもつ椎名だけに、「疎外」(「誰もだまってる機械にこきつかわれている」という客観的現実を、心穏やかにやり過ごせたとは思えない。では、「疎外」の現実をどう言語化できるのか、そしてその状況をくつがえし、人間がみずからの主体性をとり戻す道をどこに探り当てればよいのか。椎名は、胸のうちの鬱積する思いを、野間との同じ対談でこう吐き出してみせた。

「ぼくも現在物質が支配している、人間性を奪っているということがまずぼくの中にあった。それに対して戦わなきゃいけないということ、それを根本から一ぺん問い直してみようとした」

少し飛躍するが、仮にここに記されている「物質」をAと読み替えたなら、椎名の危機感が、いかに「今日性」を帯びたものであるか

のだったのか。過去ひと月ほど、折にふれて手にできた資料をもとに得た仮説といくつかの感想をここに書き連ねてみたい。

2

『懲役人の告発』(一九六九年刊)は、良くも悪しくも、時代の傷を深く負った作品である。具体的には、一九六〇年代後半、高度成長期の日本――『懲役人の告発』が、いわゆる「今日性」に欠ける小説なのか、と問われたら、むしろ逆に、私たち現代の読者にとつてきわめて切実なテーマをはらむ作品だと自信をもって答えた。そして、その切実さとは何か、との問いに対しては、少し曖昧になるが、次のような答えが可能だろう。この小説は、私たちひとり一人の存在の根もとに突き刺さった、自由という棘の深さそのものだ、と。このように書く理由は、むろん、私たちが現に置かれている状況の異常さに深くかわつている。

私たちは(少なくとも私は)、いま、科学技術のグロテスクな進化の前で立ち往生し、日々、心の余裕を失いつつある。ともかくにも追い立てられているという強迫観念を払いきれない。希望と可能性のシンボルとなるはずだったAが逆に私たちの生活を縛り、オーウェルのビッグブラザーならざる、恐ろしくも不吉な監視役を果たしはじめているのだ。他方、『懲役人の告発』では、「真の自由」という問題にからめ、間接的ながらも凄まじい暴力の主題が描かれるが、その暴力性がとてつもなく観念的と感じられる一方、昨今ネット上に溢れかえる犯罪

性となるのが、ほかでもない、「疎外」の影響をいつさい被ることのない自由の化身、福子十二歳だったのだ(ちなみに福子の年齢が、なぜ、主人公長作がトラックで轢死させた少女と同じ十二歳に設定されたかは、謎である)。物語は、死人同然の「おれ」すなわち長作が、徐々に「人間性」を取り戻していくさまを描きだしていく。他方、日に日に艶やかさを増し、やがてはエロスの化身と化す福子は、「死んだ」近親者たちのうちに凶々しくも淫らな欲望を誘発し、彼らを破滅の道へと導いていく。破滅もまた、それがかりに最終的な回答とはなりえずとも、「人間性」回復の一つの手段にはなりうるでもないわんばかりに。

思うに、禁断、つまり犯してはならない一線とは、「疎外」のもつとも原初的な様態である。だから福子の近親者にとつて真の自由を得るとは、まさに一線を越えることを意味するものとなった。父、長太郎にとつて疎外からの解放は、近親相姦によるタブーの侵犯に帰着する。そして福子凌辱の瞬間に経験した歓喜を、長太郎は次のように回想する。

「その間、わしは眩しい光のなかにいたんや。身体中にしみわたるような眩しい光や。福子さんは、ひよつとしたら神様かも知れへんと思うくらいや」

その長太郎が広告紙の裏に書き記した遺書には次のように書かれていた。

「人生万歳！ 人類万歳！ 福子さん万歳！」

福子凌辱の瞬間に長太郎が得た快楽は、ほ

のグロテスクな非日常性との間に奇妙な「親和性」を生んでいる。

物語の主人公「おれ」こと長作は、金属労働に勤しむ二十四歳の青年。一年前、友人から譲り受けた小型トラックで十二歳の少女を轢死させた過去がある。この事件で懲役四か月の実刑判決を受けた彼は、その後『懲役人』の自覚のもとに、自分は「死んだ」との感覚に責め苛まれる日々を生きている。そんな彼の内面から迸りでる最初の告白が冒頭の次の一行である。

「おれは、バリバリした真新しい札が好きだ」

多少唐突に聞こえるかもしれないのだが、私に言わせると、この一行は、『懲役人』長作によるマゾヒズム宣言である。「深夜の酒宴」以来、椎名が今もつてドストエフスキーの『地下室の手記』の影響下にあつたことを示す書き出しといつてもよい。現実から疎外された彼は、みずからのマゾヒズムによつてその状況と和解するしか生きる道はない。

3

長作のこのマゾヒズム宣言をより俯瞰的な視野から眺めたとき、新たに広がりはじめる光

とんど法悦と呼ぶにふさわしい体験だが、それはまさに善悪の彼岸に立った人間のみが経験できる至高の感覚として意味づけられた。

他方、自由放任を楯に、いつさいの規律から福子を解放とうとした育ての親長次は、第三者的な目でその目的を次のように説明してみせた。

「そやけど、おれは、人間のほんまの自由を見たかったんや。長作、ええか、福子に何をしてもええと許したのは、その自由を見たかったさかいや。それを見て、ああ、人間って何というええもんやろという思いをな一度でもしたかったんや」

しかしその長次にして、「ほんまの自由」を見る手だては、凌辱された福子に銃口を向け、その生命のオーラを自由の観念もろともに葬り去る以外になかった。

4

戦後日本における実存主義文学の草分け的存在である椎名にとつて、「自由」は、終生、彼を責めさいなみ続けたテーマである。椎名が最後の精神の抛りどころとした信仰との関わりにおいても、自由は、避けておることのできない問題だった。なぜなら、精神の救いは、信仰すなわち神の掟を遵守することのなかでしか約束されないのに対し、自由は神の不在、さらには「すべては許されている」(ドストエフスキー)という状況でこそ究極の真実を明らかにするからである(サルトルはここに実存主義の出発点を見た)。神なき世界に、善悪の境界

『懲役人の告発』
新潮社・1969年

線は存在せず、自由と放縦の間にも一線が引かれることはない。問題は、自由の化身である福子の発するオーラがあまりにも眩しすぎた点にある。神の掟を破り、その支配を脱するか、それとも神の支配のもとに留まりつつ、自由の新しい姿を探索するか。いわば、究極的ともいべき二者択一に対する答えを椎名に提示したのが、他でもない、ドストエフスキーの『悪霊』だった。

椎名は、後年、「わが心の日記」と題するエッセーで、ドストエフスキーとの〈対話〉から得た摂理について次のように書いている。

「ドストエフスキーに出会ったことは、私の心の歴史における一つの出来事であった。（……）虚無の権化であるスタヴローギンにキリーロフという神の不在を証明するために自殺する男が「人間にはすべてが許されている。少女をはずかしめても、親のけんかに赤ん坊の脳味噌をたたきわつてもいい。しかし、ほんとうにすべてが許されていると知っている人間は、そうしないだろう」という意味のことをいうときにこの矛盾したことばの間から、私のまだ知らない、新しいほんとうの自由の影が、さつと私の心に差し込んだのだ」（傍点筆者）

右のエッセーに引用されたキリーロフの言葉は、自由をめぐる椎名の思考にとてつもない可能性を与えた。彼は、その後、再三にわたつてこの体験の意味に立ち返ることになるのだが、この文章にこめられた「自由」の意味を正確にパラフレーズすることはほとんど不可能に近

い。理由の一つは、椎名が、かなり意図的に作者であるドストエフスキーの真意を曲げている点にある。たとえば、『悪霊』中キリーロフは、「赤ん坊の脳味噌をたたきわつてもいい」と言っ

てはいるものの「親のけんかに」とは口にしていない。「ほんとうにすべてが許されていると知っている人間はそうしないだろう」という言葉は、椎名のかなり恣意的な解釈である。キリーロフ自身は、たんに、人間がもし「自分たちがすばらしい」ということを理解していたなら、「女の子に暴行なんか働きません」と述べたにすぎず、そこには、取り立てて「摂理」と呼べるほどの濃密な意味性は存在しない。では、そうした曲解が椎名のうちに生じたか、ということである。おそらく理由は一つ。『カラマーゾフの兄弟』におけるイワン・カラマーゾフの有名な言葉「神がなければ、すべては許されている」が念頭にあったからである。椎名の脳裏で、一時的ながら、キリーロフとイワン・カラマーゾフの二重写しが起こった。『悪霊』のキリーロフは、人神

思想という独自の無神論のもとでの人間のありようを素朴に語つてみせたのだが、椎名は、同じキリーロフの「赤ん坊の脳味噌をたたきわつてもいい」というひと言に過剰反応した。この二言は、まさにアナーキーな

ともいえる人間存在に対する全的肯定を意味するが、その全的肯定の背後に、彼は、何かしら一切の掟を超えて存在する「摂理」を見てとつたのだろう。しかし椎名は、そこで得た直感を言語化できず、ただ「影」と呼ぶことができたにすぎなかった。では、「新しいほんとうの自由」とは何であったのか。その感覚は、福子凌辱の際に長太郎が経験した「身体中にしみわたるような眩しい光」と質的にどう異なるのか。自由は、たとえば同じ長太郎が経験した神的エクスタシーのなかには存在しないものなのか。問いをいくら重ねてもなかなか答えは出てきそうにないが、ひとつ、最終的に浮かびあがるヒントがある。それは、「自由」が、善悪の彼岸に立とうとするものへのある種の寛容さを含むということだ。もつとダイレクトに言うなら、「赦し」の感覚ないしは「宏量」の感覚である。

＊本編の続きは、世田谷文学館ホームページ「館長ご挨拶」みねるば通信」をご覧ください。
<https://www.setabun.or.jp/minerva/>



世田谷文学館コレクション展 没後50年・椎名麟三と「あさって会」

2023年4月22日(土)～2023年9月3日(日)

＊展示室内の設備不具合に伴う点検整備のため、
本展は8月6日(日)で閉幕とさせていただきます

資料受贈報告

2023年1月7日～8月31日

▼今井恭子様 小川晴子様 相馬聖子様 高橋悦男様 竹村啓様 中里夏彦様 松平盟子様 森崎憲司様 矢野勝巳様 山瀬ひとみ様

▼赤磐市教育委員会 アジア文化社 池波正太郎記念文庫 石川近代文学館 伊豆文学フェスティバル実行委員会 井上靖記念館 茨城県常総市・節のふるさと文化づくり協議会 茨木市立川端康成文学館 いわき市教育文化事業団 うらわ美術館 大島博光記念館 大田区立龍子記念館 賀川豊彦記念松沢資料館 学習院大学史料館 神奈川近代文学館 金沢文化振興財団 金沢文芸館 紙の博物館 川崎市市民ミュージアム 菊池寛記念館 北九州市立文学館 北九州市立松本清張記念館 京都工芸繊維大学図書資料館 京都2025実行委員会 近代作家旧蔵書研究会 クマヒラ・ホールディングス 群馬県立土屋文明記念文学館 慶應義塾大学アー・センター 國學院大学博物館学研究所 国文学研究資料館 国立映画アーカイブ 国立新美術館 郡山市こおりやま文学の森資料館 越谷市立図書館野口富士男文庫 さいたま文学館 埼玉文芸家集団 斎藤茂吉記念館 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木幸綱記念館 サントリウム 勝央美術館 昭和館 白百合女子大学言語・文学研究センター 杉並区立郷土博物館 杉並区立郷土博物館 成城大学民俗学研究所 全国文学館協議会 仙台文学館 台東区立朝倉彫彫館 高遠書房 田原市博物館 たましん地域文化財団 田山花袋記念文学館 茅野市美術館 千葉市美術館 運筆堂文庫 沖積舎 調布市武小路実篤記念館 千代田区立日比谷図書館 鶴岡市立藤沢周平記念館 帝京大学総合博物館 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館 東京都江戸東京博物館 東京都教育委員会 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー 東京都博物館協議会 徳島県立文学書道館 徳田秋聲記念館 徳間書店大蔵春彦賞選考委員会 富山県芸術文化協会 中原中也記念館 新美南吉記念館 西尾市岩瀬文庫 日本近代文学館 日本現代詩歌文学館 日本トルストイ協会 沼津市片沢光治良記念館 沼津牧水会 野田宇太郎文学資料館 野村胡堂・あらえびす記念館 萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館 萩原朔太郎研究会 飯能市教育委員会 姫路文学館 福岡市文学館 ふくやま文学館 文庫書房博文社 文京ふるさと歴史館 北海道文学館 山口市立子規記念博物館 岬の分教場保存会 三島市郷土資料館 武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 三島市郷土資料館 武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 山梨県立美術館 弥生美術館・竹久夢二美術館 横浜市史料資料室 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター 立命館大学 論創社 和歌山県立近代美術館

▼「阿部知二研究「海」「海紅」「カプリチオ」「経常権記」「今日の花」「空想カエ」「原型富山」「鴻一心の花」「鹿首」「抒情文芸」「詩霊」「駿河台文芸」「川柳研究」「巖」短歌人「地中海」「飛火」「風」「フチ★モンド」「文藝軌道」「文章歩道」「焰」「窓」「横光利」「ランブル」「りんごの木」「暦日」

2022(令和4)年度 世田谷文学館事業報告

令和4年度の企画展は「ヨシタケシンスケ展かもしれない」「月に吠えよ、萩原朔太郎展に加え、新しくスタートしたシーズン展示「漫画家・山下和美展 ライフ・イズ・ビューティフル」の計3本を実施した。「ヨシタケシンスケ」展は、今最も人気のある絵本作家ヨシタケ氏の初的大型企画展として当館で立ち上げ、その後全国巡回を果たしている。本展では従来の絵本原画展の手法から脱却し、氏が考案するアトラクションで作品世界を楽しむ趣向を取り混ぜた。「ちょっとずらした視点でものごとを見る」「ヨシタケ氏の世界観により、斬新な展示空間が実現した。」「朔太郎」展は、没後80年を記念した全国の文学館によるプロジェクト、「萩原朔太郎大全2022」の一つとして開催した。

当館では、2011年にも朔太郎展を開催したが、従来の文学ファンに加え、今回は20く30代の来館者も増え、「現代詩」の受容が次世代にも確実に受け継がれていることを示す展覧会となった。山下和美展は、「今届きたい旬な展示をいち早く」を掲げたシーズン展示の第1回目として、区内在住漫画家の作品を新作も含め紹介する絶好の機会となった。コレクション展は、昨年に続き開館25周年記念「セタブン大コレクション展PARTⅡ」と、展覧会「下北沢猫町散歩」を開催した。後者では、下北沢で晩年を過ごした朔太郎に因んで、同地にゆかりのある作家たちを紹介した。室内には、作家の足跡が記された白地図に、来館者が「シモキタ」にまつわる思い出を付箋に書いて貼っていく参加型の展示マップを設けた。予想以上に多くの方にご参加いただいたことで、地域の歴史と来館者一人ひとりの記憶が層を成し、時空間が重なり合うマップが完成した。

資料収集・整理事業では、主要なコレクションの情報を閲覧できるホームページ検索の第三弾となる「映画監督・成瀬巳喜男旧蔵資料」の公開が加わった。まもなく開館30周年を迎える当館が管理する文学資料は、今後の文学・文化史研究においても、地域の歴史を知る資料としても重要なものとなる。特に現代文学の資料は調査研究がこ

TOPICS

企画展 展示風景



月に吠えよ、萩原朔太郎展
2022/10/1～2023/2/5 写真：浅川敏

シーズン展示 展示風景



漫画家・山下和美展 ライフ・イズ・ビューティフル
2022/7/30～9/4



ヨシタケシンスケ展かもしれない
2022/4/9～7/3 写真：黒澤義教

コレクション展 展示風景



下北沢猫町散歩
2022/10/1～2023/3/31 写真：澤木亮平



世田谷文学館開館25周年記念 セタブン大コレクション展 PARTⅡ
山ありてわが人生は楽し
2022/4/9～9/11 写真：須藤正男

2022(令和4)年度
事業一覧

1 展覧会				
展覧会名	会期	日数(日)	一般観覧料(円)	観覧者数(人)
●コレクション展				
前期 世田谷文学館開館25周年記念 セタブン大コレクション展PARTⅡ 山ありてわが人生は楽し	2022/4/9～9/11	135	200	9,163
後期 下北沢猫町散歩	10/1～2023/3/31	151	200	7,375
●企画展				
ヨシタケシンスケ展かもしれない	2022/4/9～7/3	74	1,000	59,843
漫画家・山下和美展 ライフ・イズ・ビューティフル	2022/7/30～9/4	32	無料	3,408
月に吠えよ、萩原朔太郎展 Sakutaro Hagiwara: Howl at the moon	10/1～2023/2/5	105	900	8,789
		合計		88,578

2-1 普及事業：どこでも文学館(出張展示)		
●展覧会名(無料)	開催日	観覧者数(人)
会場		
●「OSAMU'S MOTHER GOOSE」		
梅丘図書館	2022/4/1～7/13	(前年度からの 継続展示)ー
●「北杜夫 どくとるマンボウ昆虫展」		
川場村なかのビレジB棟	4/1～6/20	(前年度からの 継続展示)ー
祖師谷小学校	10/11～10/21	662
●「台湾・世田谷交流バナー 台湾はどんな国？」		
川場村ふじやまビレジせせらぎの湯	4/1～6/20	(前年度からの 継続展示)ー
奥沢区民センター	12/2～12/23	2,179
●「大竹英洋 ノースウッズ 生命を与える大地」		
せたがや文化財団 生活工房	6/4～7/10	(生活工房との 共催展示)ー
コミュニカフェなつこの	7/22～8/24	1,109
船橋希望中学校	9/1～9/27	347
千葉市みずはろの花図書館	10/1～10/26	9,073
長野県塩尻市図書館	11/19～12/18	200
●「若草物語 -Little Women-」		
川場村ふじやまビレジせせらぎの湯	6/21～10/18	6,803
中央図書館	2023/2/16～3/30	46,883
●「水丸さんのがたんごとん」		
川場村なかのビレジB棟	6/21～10/18	3,894
中央図書館	7/28～8/24	37,023
府中市立図書館	9/30	336
山崎小学校	10/21～11/15	363
上戸賀保育園	2023/1/6～1/26	103
八幡山幼稚園	2023/2/1～2/17	43
●「シートン動物記」		
奥沢区民センター	6/24～7/8	1,949
梅丘図書館	7/14～9/7	25,500
川場村ふじやまビレジせせらぎの湯	10/18～ 2023/3/31	6,984
●「井上ひさし ふかいことをゆかいに」		
玉川中学校	6/24～7/29	360
川場村なかのビレジB棟	10/18～ 2023/3/31	2,384

●「大竹英洋 北の森 ノースウッズの世界」		
奥沢区民センター	8/12～9/8	2,467
千葉市みずはろの花図書館	10/27～11/19	11,012
books & gallery 羅秀夢(広島県)	12/3～12/25	120
●「宮西達也と子どもたち」		
芦花小学校	9/1～9/27	1,084
山野小学校	9/28～10/21	1,141
池之上小学校	11/1～11/25	314
稲城市立iプラザ図書館	2023/1/22～2/5	524
●「宮沢賢治 幻想紀行」		
弦巻小学校	9/1～9/27	799
八幡小学校	9/28～10/21	347
●「山へ! to the mountains」		
梅丘図書館	9/8～2023/3/1	83,400
●「水上勉のハローワーク」		
桜丘中学校	9/9～10/11	671
●「SF入門 星新一」		
中里小学校	10/11～11/15	232
太子堂小学校	11/15～11/25	588
●「詩人・萩原朔太郎」		
世田谷文学館	11/20～3/31	2,111
●「セタブン人生相談 ―あなたのための人生処方箋」		
大田区立馬込図書館	12/16～ 2023/2/15	320
		合計 251,325

2022(令和4)年度 助成・協賛		
[助成]	文化庁 令和4年度文化資源活用事業費補助金(日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業)	
[協賛]	株式会社ウテナ、鳥山駅前通り商店街振興組合、JA東京中央農業協同組合、昭和信用金庫、世田谷信用金庫、東邦ホールディングス株式会社、ベネッセスタイルケア芦花翠鳳邸、芦花公園商店街振興組合	(50音順)

2-2 普及事業：どこでも文学館(ワークショップ)ほか			
内容	開催日	参加者数(人)	
活動支援事業・友の会総会記念講演会 「ファザコンからの脱却 ―父・阿川弘之の生誕100年を迎えて」 講師：阿川佐和子(エッセイスト) 共催：世田谷文学館友の会	2022/4/3	146	
ヨシタケシンスケ展関連イベント 「りんごかもしれない」(2回公演) 出演：人形劇団ブーク	6/1	117	
活動支援事業・友の会共催講演会 「人生百年時代のドフトエフスキー」 講師：亀山郁夫(世田谷文学館館長) 共催：世田谷文学館友の会	7/9	106	
ワークショップ「萩原朔太郎プレイベント あなたの言葉が詩になる！ 朗読と語りのワークショップ」(4回開催) 講師：TOLTA(ヴァーバル・アート・ユニット)	7/30, 8/5	31	
共催ワークショップ「猫町フラッグをつくろう」 (2回開催 世田谷区立池之上青少年交流センター音楽室) 講師：佐藤愛(舞台美術 造画・造形担当/「第三図工室」代表) 共催：世田谷区立池之上青少年交流センター	8/7, 8/21	40	
オンラインイベント「探検をはじめよう！ ―探検家の想像力―」 講師：高橋大輔(探検家)	8/28	21	
共催事業「日経『星新一賞』出張授業」 講師：藤崎慎吾(SF作家、第1回日経「星新一賞」一般部門グランプリ受賞) 共催：日経「星新一賞」実行委員会	9/11	15	
萩原朔太郎展関連イベント オンライン講演会「喪失と郷愁 ―萩原朔太郎と世界の旅人」 講師：エリス俊子(比較文学者)	10/30	58	
「生業さがし」ー児童文学をささえる仕事ー 講師：日下部由佳(講談社 幼児図書編集部)	11/6	7	
0才からのジャズコンサート(3公演) 出演：クニ三上(ピアノ)、越野振人(ベース)、田村陽介(ドラムス)	11/17	219	
活動支援事業・友の会共催講演会 萩原朔太郎歿後80年「初版本、『月に吠える』の不思議」 講師：萩原朔美(前橋文学館館長、多摩美術大学名誉館長) 共催：世田谷文学館友の会	11/20	97	
ワークショップ「もっと朗読を楽しもう」 ～プロの読み方を聞いてやってみよう～(芦花小学校共催) 講師：緒方賢一(俳優、声優)、水田わさび(声優)	12/10	186	
ダンスワークショップ「ことばとからだ フェルトバッジでウィンターダンス!!」 講師：日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部 (顧問：松澤慶信、リーダー：佐藤ひなた)	12/11	6	
月に吠えよ、萩原朔太郎展関連イベント「猫町ラビリンス」(段ボール迷路)	12/17～ 2023/2/5	986	
その他(職場体験、学芸員実習、活動支援事業での講師派遣など)	通年	418	
	合計	2,453	

3 ライブラリー・講義室等	
施設	利用者数(人)
ライブラリー	22,559
講義室	1,761
くつろぎスペース	8,491

4 文学資料収集・保管(点数)	
令和4年度収蔵点数	694
令和5年3/31現在の収蔵品点数	101,779
特別閲覧件数(点数)	10
特別観覧件数(撮影点数)	267
収蔵資料貸付	114

5 刊行物			
タイトル	判型/頁数	頒価(円)	
●世田谷文学館ニュース			
第80号9月 巻頭エッセイ 「遠き山に日は落ちて」亀山郁夫(世田谷文学館館長)/ 2021年度世田谷文学館事業報告	A4/8	無料	
第81号3月 巻頭エッセイ 「罪を憎んで、人を憎まず」亀山郁夫(世田谷文学館館長)/ 2022年度世田谷文学館展覧会事業報告/収蔵品紹介 椎名麟三関連資料	A4/8	無料	
●展覧会図録			
ヨシタケシンスケ展かもしれない 公式図録 「こっちだったかもしれない」 (白泉社 MOE 編集部発行)	B6変形/496	2,970円(税込)	
「朔太郎の詩・手帖」(「月に吠えよ、萩原朔太郎展」ミニカタログ)	A6/68	500円(税込)	
●その他			
「月に吠えよ、萩原朔太郎展」リーフレット	A3(8ツ折)/1	無料	
どこでも文学館報告書2022	B2(4ツ折)/1	無料	
移動文学館 出張展示キット 貸出案内パンフレット	A5/40	無料	

6 年間利用者数	
	375,167



ワークショップ(画像右側)の展示風景
(「月に吠えよ、萩原朔太郎展」会場)
2022/10/1～2023/2/5



ワークショップ「猫町フラッグをつくろう」(共催：世田谷区立池之上青少年交流センター)
講師：佐藤愛(舞台美術 造画・造形担当/「第三図工室」代表)
2022/8/7・8/21 フラッグ掲出協力：下北沢商店連合会



「生業さがし 児童文学をささえる仕事」
講師：日下部由佳(講談社・幼児図書編集部) 2022/11/6



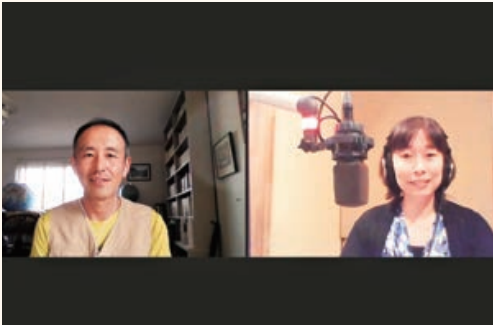
ダンスワークショップ
「ことばとからだ フェルトバッジでウィンターダンス!!」
講師：日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部
(顧問：松澤慶信、リーダー：佐藤ひなた) 2022/12/11



ワークショップ「萩原朔太郎プレイベント あなたの言葉が詩になる！
朗読と語りのワークショップ」
講師：TOLTA(ヴァーバル・アート・ユニット) 2022/7/30、8/5



ワークショップ成果物(画像左側)の展示風景
(下北沢の商店街270か所に掲出)
2022/11 初旬～12中旬



「ほんとわラジオ」9月放送分 エフエム世田谷(83.4MHz)
前編9/1・中編9/15・後編9/29放送
パーソナリティ：河西美紀 出演：高橋大輔(探検家)



「もっと朗読を楽しもう ～プロの読み方を聞いてやってみよう～」
(芦花小学校共催)
講師：緒方賢一(俳優、声優)、水田わさび(声優) 2022/12/10



出張展示キット「詩人 萩原朔太郎」
出張展示キット「世田谷の書」

これから本格的に行われることが予想され、研究発展のためにも計画的に公開していきたい。

普及事業では、コロナ禍に開始したZoomウェビナーによるオンライン講座を充実させるとともに「喪失と郷愁」萩原朔太郎と世界の旅人 講師：エリス俊子 等へ、出張展示や多彩なワークショップを実施する「どこでも文学館」での対面式プログラムが復活した。区内大学の日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部との連携企画(「ことばとからだ」)では、久しぶりに子どもたちの明るい笑顔が館内に広

がった。また、芦花小学校との共催企画(「もっと朗読を楽しもう」)も、活躍中の俳優二人を講師に迎え、思い出に残る貴重な体験となった。出張展示では、区内在住の書家の作品をタペストリー状に制作したキットと、企画展「萩原朔太郎展」に連動したジュニア世代向けの展示キット「詩人・萩原朔太郎」を制作した。また、池之上青少年交流センターとの共催ワークショップで、朔太郎作品にちなんだ絵を描いたフラッグを制作し、会期中に下北沢駅周辺の各商店街で掲出するなど、区内の様々な地域団体と連携するアウトリーチ活動も行った。

世田谷文学館が「セタブン」の愛称で呼ばれるようになり、SNS上でもその名が広まりつつあるが、昨年から開始した「ほんとわラジオ」も多彩なゲストが出演し、「セタブン」ならではの「耳で聴く文学」として定着してきた。加えて、「ほんとわ」発の朗読コンテンツ制作にも取り組み、YouTube配信も開始した。さまざまな媒体から「セタブン」が発信する(文学)を伝えることは、今後ますます重要となる。利用者にとって便利で、充実した情報発信を今後も展開していく。

企画展

江口寿史展
 ノット・コンプリ― テッド
 2023年9月30日(土)～
 2024年2月4日(日)

江口寿史(1956～)は、80年代からポップカルチャーの象徴的存在として、今なお幅広い世代に影響を与え続けています。本展では『すすめ!!パイレーツ』や『ストップ!! ひばりくん!』などの漫画原画からイラストレーションの数々を一堂に展示し、江口作品の魅力をご紹介します。

【観覧料】

一般1,000(800)円/
 65歳以上・大学・高校生600(480)円/
 小・中学生300(240)円/
 障害者手帳をお持ちの方500(400)円(但大学生以下は無料)
 ※()内は団体割引と「せたがやアーツカード」割引料金
 ※9月30日(土)は60歳以上無料 ※10月6日(金)は65歳以上無料
 ※混雑状況によりご入場をお待ちいただく場合がございます

観覧チケット

オンラインチケット及び当日券を販売いたします
 ※オンラインチケットの詳細は、世田谷文学館ホームページ
 (https://www.setabun.or.jp/)をご覧ください
 ※電話でのご予約は受け付けておりません

Special Exhibition

Hisashi Eguchi Exhibition: Not Completed

Saturday, September 30, 2023 to Sunday, February 4, 2024

Hisashi Eguchi (b.1956) has been an iconic presence in pop culture since the 1980s and continues to influence a wide range of generations today. This exhibition features many illustrations from original frames of manga such as *Susume!! Pirates and Stop!! Hibari-kun!* in one place, highlighting the appeal of Eguchi's works.

Admission Fees

General admission: ¥1,000 (800); Over 65 / College or High School Student: ¥600 (480); Junior High and Elementary School Student: ¥300 (240); Disability certificate holders: ¥500 (400) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)

- * Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card
- * On Saturday 30th September, admission is free of charge for persons who are 60 years of age or older
- * On Friday 6th October, admission is free of charge for persons who are 65 years of age or older
- * If the museum is crowded, you may need to wait to enter.

Exhibition Tickets

Online tickets and same-day tickets are available.

- * For details regarding online tickets, please see the SETAGAYA LITERARY MUSEUM website (https://www.setabun.or.jp/).
- * We cannot accept phone inquiries.

利用案内

開館時間:10時～18時(展覧会入場、ミュージアムショップは17時30分まで)

休館日:毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館し翌日休館) 年末年始

割引料金:企画展・コレクション展ともに

団体(20名以上)は2割引

* 団体利用は事前にお問合せください。障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額。

世田谷区内在住の小学生・中学生は、土曜、日曜、祝・休日のコレクション展は無料

交通案内:

京王線「芦花公園」駅南口より徒歩約5分
 京王線「千歳烏山」駅南口より徒歩約13分
 小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)「芦花恒春園」下車徒歩約5分



2023年9月

江口寿史展 ノット・コンプリ― テッド

10月

11月

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

2023年9月30日

コレクション展

衣裳は語る ―映画衣裳デザイナー・柳生悦子の仕事

2023年10月7日(土)～2024年3月31日(日)

同時開催 ムットーニコレクション

現代劇から時代劇まで、あらゆるジャンルの映画衣裳デザインを手掛けた柳生悦子(1929～2020)。本展では、生前本人から寄贈された『裸の大將』『大学の若大將』『風林火山』『敦煌』などをはじめとする多くのデザイン画を通じて、日本映画黄金期に衣裳デザインのパイオニアとして活躍した柳生悦子の仕事をご紹介します。



【観覧料】

一般200(160)円/
 大学・高校生150(120)円/
 65歳以上・小・中学生100(80)円/
 障害者手帳をお持ちの方100(80)円(但、大学生以下は無料)
 ※()内は団体割引と「せたがやアーツカード」割引料金
 ※世田谷区内在住・在学の小中学生は、土、日、祝、休日はコレクション展は無料になります
 ※混雑状況によりご入場をお待ちいただく場合がございます

SETAGAYA LITERARY MUSEUM Collection Exhibition

Costumes Speak: The Work of Film Costume Designer Etsuko Yagyu

Saturday, October 7, 2023 to Sunday, March 31, 2024

Simultaneous Exhibition: MUTTONI Collection

Etsuko Yagyu (1929～2020) worked on movie costume design in all genres, from modern drama to period drama. This exhibition features many designs donated by the artist during her lifetime, including designs from *Hadaka no Taisho*, *Sir Galahad in Campus*, *Furin Kazan*, and *The Silk Road*, through which we see Etsuko Yagyu's work as a pioneer in the golden age of Japanese cinema.

Admission Fees

General admission: ¥200 (160) / College or High School Student: ¥150 (120); Over 65 / Junior High and Elementary School Student: ¥100 (80); Disability certificate holders: ¥100 (80) yen (Disability certificate holders of college age and below are admitted free of charge)

- * Amounts in parentheses group discounts and reduced rates for holders of the Setagaya Arts Card
- * Residents of Setagaya City and elementary / junior high school students attending school in Setagaya City can enter the collection exhibition free of charge on weekends and holidays.
- * If the museum is crowded, you may need to wait to enter.

Visitor Information

Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)

Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday) New Year holidays (Dec.29-Jan.3)

Group Discount: Groups of 20 + visitors will receive a 20% discount on admission fee both collection and special exhibitions.

Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate.

Elementary and junior high school students, who studies or resides in Setagaya city, are admitted free on weekends, national holidays.

Access:

- about 5-minute walk from Roka-koen Station's South Exit (Keio Line)
- about 13-minute walk from Chitose-karasuyama Station's South Exit (Keio Line)
- about 5-minute walk from Roka Koshunon (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-karasuyama Station [Keio Line])